

日本科学未来館 館長

毛利 衛



開館8年目を迎えた日本科学未来館は、その活動の幅を懸命なる努力によって広げています。平成20年度は常設展示を4ヵ所リニューアルして公開しました。

開館以降初めて大幅にコンセプトを見直した「技術革新と未来」の展示は、先端研究に挑む科学者の想像力・創造力の源を解き明かすことをテーマにしました。人類の生存に関わる「地球環境とわたし」の展示は、生命と環境の本質的な問題点に迫っています。さらに宇宙日本実験棟「きぼう」建設と実験運用開始に伴い「こちら、国際宇宙ステーション (ISS)」を新設し、宇宙実験の詳細と日本人宇宙飛行士の活躍がわかるようにしました。情報技術とアートが結びついた展示を紹介する「メディアラボ」もオープンしています。

一方、ドームシアターガイアでは世界で最も高精細な三次元映像を投影できる没入感満点の「Atmos」を完成させました。また、多くの人々の関心を集めたノーベル化学賞・物理学賞受賞のニュースなどもタイムリーに取り上げたため、メディアからの取材も多く、国立の科学館としての役割をおおいに発揮した一年でもありました。

21年度は「初心に戻る」を合い言葉に、国が設定した未来館本来のミッションを長期的な視点から改めて見据え、活動を展開していきます。先端研究と社会を結ぶ「新しい展示手法の開発」や、「科学コミュニケーターの育成と輩出」に尽力し、この成果を「国内外の科学館連携」を通じて国内各地域の科学館やアジアを中心とした海外へ広げる計画です。こうした活動は、多くの外部組織と連携することで可能となります。研究者コミュニティからの支援のもと学校、国内外の科学館、産業界、メディア、行政などさらにつながりを深めながら、今後も着実に歩みを進めていくつもりです。